

[研究ノート]

日本における絵本関連ワークショップの 先行研究調査

寺島 知春(東京学芸大学大学院教育学研究科美術教育専攻、ライター)

抄録

本論文は、わが国で絵本関連ワークショップ研究がどう行われてきたかを明らかにするものである。絵本学会研究紀要における文献群(115文献)と、CiNii検索で該当した文献群(47文献)という2つの対象を調査分析した結果、絵本研究の場である前者では2000年から5件の文献が該当し、そこで扱われる絵本関連ワークショップは人間の思考を捉える傾向があると判明した。一方、後者は一般の研究の場であり、そこでは該当文献の主要な流れがやはり2000年前後から始まっているのは同じだが、文献内で扱われる絵本関連ワークショップは絵本や絵本の概念を手段として限定的に捉える傾向があると判明した。こうした結果を土台として、新たに方向性の選択という課題が生まれることと、両群の間に横たわる認識の溝をどう扱っていくかとの課題が生まれることを指摘し、引き続きの観察が必要であると結論づけた。

Key word

絵本、ワークショップ、先行研究

1.はじめに

本論文は、わが国で絵本関連ワークショップ研究がどう行われてきたかを明らかにし、この分野の先行研究に関する基礎的情報を提示するものである。絵本研究の場における文献群と、一般の研究の場における文献群という2つの対象を調査、分析し、先行研究の全体的な見取り図を描き出すことを目的とする。これにより、この分野における今後の課題や可能性を明らかにする。

1-1. 研究の背景

日々の何気ない場面で、ワークショップという言葉を目にする機会は多い。ためしに筆者の住む東京都西東京市のワークショップをインターネット検索すれば、たとえば市が運営に関わるものとして「多摩六都フェア パラアート制作ワークショップ」¹⁾や「『地域映画』制作ワークショップ」²⁾を見つめられる。一般市民がこうしたものに気軽に参加できる状況の中で、絵本関連ワークショップもまた日常茶飯事であり、さらに絵本関連ワークショップを取り上げた研究も行われている。

ところが、国内における絵本関連ワークショップ研究の全体像はこれまでほとんど把握されてこ

なかった。今後、本分野の研究がいくつも積み重ねられるだろうと仮定した時、この全体像を研究者らが把握・共有することは、文脈に沿った論理展開によって議論を発展させたり、未着手の分野に挑戦したりする上で、欠かせないことではなかろうか。また、全体像の把握は、将来生まれるであろう個々の文献内容のみならず、それらの文献内で実施される絵本関連ワークショップにも、幅を与えると予想する。こうした課題の存在を捉え、研究に着手した。

1-2. 研究の目的と構成

本研究では、わが国で発表された絵本関連ワークショップ研究を包括的に調査分析し、その見取り図を提示することを目的とする。第一章では既に見てきた通りであるが、研究の背景や目的を述べ、この後に本論文で使用する言葉の定義について述べる。第二章では、絵本学会研究紀要における先行研究を調査、分析する。第三章では、CiNii検索で該当した先行研究を調査、分析する。第四章では、第三章までで明らかになった実態をふまえ、総合的な考察を行って結論づける。

1-3. 用語の定義

本論文で絵本関連ワークショップという言葉を使用し、単に絵本ワークショップとしないのには理由がある。絵本とは本来、紙の印刷物を製本したものを指すが、今日のワークショップの場ではデジタルコンテンツが絵本の代用品として用いられったり、絵本という物体は用いられないが「絵本の観念」は取り入れられているなど、多様な取り組みが存在するからである。

そもそも絵本とは、様々な解釈の余地を有する言葉だ。香曾我部秀幸(2012:10)によれば「広義には『絵のある本<挿し絵入りのこどもの本>』、狭義に『文(言葉)と絵が融合して物語を展開する本』として一般に認識されている」としつつ、それだけでは定義として不十分であると指摘した上で、改めて「絵本は、絵(視覚表現)と詞(言語表現)という、異なる二つの要素が互いに調和結合した、本(書籍)という形態を持つ表現メディアである」とされる。ここからは、物体としての絵本を重要視する姿勢がうかがえる。一方で、たとえば村中李衣(2004:28)は「絵とことば、『描く力』と『語る力』がからみあって、ひとつの流れを持ちながら、構築される世界である」と言い表し、さらに「文字のない絵本であろうと、絵の中にもことばがあり、画面を構成する余白にもことばがあり、絵にも文にもことばがある(中略)文字も画面の中の重要な絵であるし、ことばと絵がつながれて初めて世界が見えることもある」と述べる。ここからは、絵本内で表現されるものから受け取るイメージを含めて「絵本」とする姿勢がうかがえる。先述の「絵本の概念」とは、これを指して使った言葉だった。本論文ではこうした概念のもと、物体としての紙の絵本を用いたワークショップを絵本ワークショップ、デジタル表現や絵本の概念を組み込んだワークショップを絵本的表現ワークショップとし、2つを総称して、絵本関連ワークショップと定義する。

また、ワークショップという言葉については、中野民夫(2001:11)による「『講義など一方的な知識伝達のスタイルではなく、参加者が自ら参加・体験して共同で何かを学びあったり創り出したりする学びと創造のスタイル』を『ワークショップ』と呼んでおきたい」の言を引き、「一方向的でなく、双方向的であること」「参加者の体験があること」の2要素を満たすものと定義する。

2. 絵本学会研究紀要における先行研究

本研究では、絵本学会研究紀要に属する文献群と、CiNiiで「絵本 ワークショップ」と検索して該当した文献群の、2つのまとまりに分けて検討を進めた。本章ではまず、前者を取り上げる。

絵本関連ワークショップの先行研究を探すのに最適な文献群として「絵本学会研究紀要」に注目した。1999年の創刊号から2018年の20巻までを通読し、収録文献115件から絵本関連ワークショップに関するものを取り上げて検討して、絵本研究の場における絵本関連ワークショップの位置づけや扱われ方を把握した。結論から述べれば、該当文献は表1の5件にとどまり、115件の内で絵本関連ワークショップについて書かれたものはかなり少ないとわかった。

2000年（第2号）	「現代タイ絵本の概況」竹内由子
2005年（第7号）	「美術へのアプローチとしての絵本の可能性」杉浦篤子
2017年（第19号）	「保育者養成校授業における絵本の効果—『おこだでませんように』を読む学生の視点—」三好伸子
2018年（第20号）	「哲学的なテーマのある現代絵本の可能性—大人と子どもが『ぼくのニセモノをつくるには』を対話的に読む—」永井雅子 「『さっちゃんのまほうのて』を学生同士が読み合う効果—保育者養成校のレポート記述の分析—」三好伸子

表1 絵本学会研究紀要内で絵本関連ワークショップを扱った文献

本群においてワークショップという言葉は、「現代タイ絵本の概況」(竹内,2000)で初めて登場した。タイで図書館ボランティアに従事する論者によって、タイのおおまかな絵本史と、発表当時のタイの物語絵本が5ジャンルに大別できることが示された。文献内でワークショップという言葉は2度登場した。ただし、いずれもワークショップ開催の事実のみを伝え、内容や意図などの詳細記述はなかった。なお、本文献では「2-5.お話会に適した絵本」で、お話会での絵本の読み聞かせ方法についての言及が見られた。しかし、お話会や読み聞かせは一般に、物語を提示する大人とそれを享受する子どもという一方向的な位置の固定があるため、第一章で示したワークショップの定義にあてはまらないと考え、ここでは扱わない。

次にワークショップの話題が紀要内で登場するのは、5年後だ。「美術へのアプローチとしての絵本の可能性」(杉浦,2005)では、ワークショップという言葉は使われないものの、まさしくその話題を扱っている。論者は、現代では表現することや美術が専門者だけに委ねられているとし、誰もが本来持つ造形能力に働きかけるには絵本が役立つと仮定して、保育者養成課程の学生らを対象とした絵本を使う2件のワークを行った。その結果、絵本を使った美術は造形表現の経験不足を補うことができ、美術に苦手意識を感じる保育養成課程の学生にも有効であると結論づけた。

2017、2018年には、立て続けに3文献が該当テーマを取り上げた。「保育者養成校授業における絵本の効果—『おこだでませんように』を読む学生の視点—」(三好,2017)および「『さっちゃんのまほうのて』を学生同士が読み合う効果—保育者養成校のレポート記述の分析—」(三好,2018)は、同じ論者によって執筆された。前者では、保育者養成課程の学生に障がい児の実際をよりよく理解させるには絵本が有効と仮定して、彼らに絵本を用いた8限の授業を用意し、最終回にそれまで読んだ絵本から1冊を選んでレポートを作成させた。よく選ばれた絵本の

内、特に『おこだでませんように』(くすのきしげのり／作、石井聖岳／絵、小学館、2008)に注目して、この読み取りから学生が能動的に学習した様子を指摘し、この絵本が障がい者理解を含めた子ども理解・保護者理解のための教材として有効であるとした。後者では、前者と同様に授業実施までを行い、最終回でレポートに取り上げる絵本として『さっちゃんのまほうのて』(たばたせいいち／作・絵、偕成社、1985)を選んで、その絵本がもたらす生涯学習効果を検討した。検討前に論者は、この絵本が「障害児に関する知識・理論の理解」「実践課題解決や、今後の課題解決」「学習意欲の増進」に効果をもたらすと予想し、結果的に3点全てに効果があると結論づけた。

「哲学的なテーマのある現代絵本の可能性—大人と子どもが『ぼくのニセモノをつくるには』を対話的に読む—」(永井,2018)は、「現代タイ絵本の概況」以外のこれまでの文献が授業での実践を述べたのに対し、初めてワークショップと冠する実践について述べたものだ。現代絵本『ぼくのニセモノをつくるには』(ヨシタケシンスケ、ブロンズ新社)を『自分とは何か』という哲学的なテーマがあり、現代絵本としての特徴を備え「る作品とし、論者と10～12歳の4名の子どもたちがこの絵本を仲立ちに哲学的な要素を含む対話をした様子を記録し分析した。その結果、子どもたちは哲学的な対話を成立させ問いを自分たちで深められることがわかり、またそうした対話を成立させる現代絵本の特徴を4点考察した。

絵本関連ワークショップを扱う5文献では、ワークショップという言葉だけが見られた最初期の段階から、授業内での絵本関連ワークショップを扱った複数の文献が出現した段階を経て、2018年になって一般を対象とした絵本関連ワークショップをテーマに据えた1件がようやく見られた状況までを把握できた。一方で、2017、2018年と絵本関連ワークショップを扱う文献が目立って多くなったことは、絵本やその概念をより道具的に捉え、それを使って何らかの気づきや答えを導き出そうとする動きが、絵本研究界隈で起こってきたことの表れと言える。

3.CiNii 検索で該当した先行研究

CiNii 検索群の先行研究の検討では、一般の研究で絵本がどう用いられているかを把握できる。論文検索データベース CiNii で「ワークショップ 絵本」と検索して該当した全47件の文献を対象とした。末尾に文献リストを添付する。なお、調査のために各文献には便宜的に文献番号を付した。これも文献リストを参照されたい。各文献内での絵本の用いられ方で47件を分類すると「別テーマ(伝達、調査、啓蒙)」「表現」「活動の一部」「再現」「導入」「検討の対象」「読み聞かせの道具」「参考例」「まとめ」「経験の拡大」「プロ作家の育成」「その他(ハウツー、宣伝、評論、分類不可)」の12カテゴリにでき、各該当文献数は図1の通りとなった。「別テーマ(伝達、調査、啓蒙)」と「表現」の2カテゴリが際立って多かった。

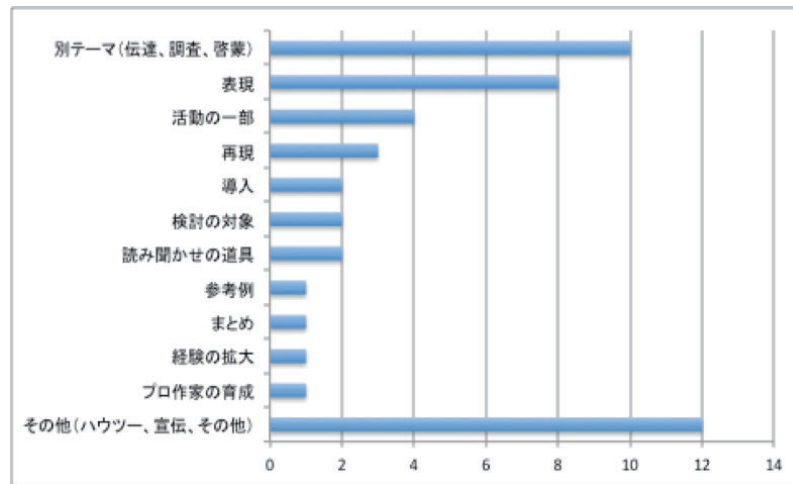


図1 47文献の分類とその群に属する文献数

各カテゴリ名を説明する。「別テーマ(伝達、調査、啓蒙)」に属する文献では、文献内におけるワークショップで、絵本が、別テーマの伝達あるいは調査、啓蒙のために用いられた。「表現」に属する文献では、文献内におけるワークショップで絵本の制作が行われ、制作は個々人の内面の表現を目的とした。「活動の一部」に属する文献では、文献内における一連の活動に、絵本が一部として組み込まれた。「再現」に属する文献では、文献内におけるワークショップで、絵本(市販、自作を問わない)の内容を再現していた。「導入」に属する文献では、文献内におけるワークショップの導入として絵本を取り入れていた。「検討の対象」に属する文献では、絵本を何らかの検討の対象として扱っていた。「読み聞かせの道具」に属する文献では、文献内で絵本を読み聞かせに使用する道具として捉え、その具体的な方法を述べていた。「参考例」に属する文献では、そこで述べられたテーマの参考例として絵本を引き合いに出していた。「まとめ」に属する文献では、そこで述べられたテーマを総括するものとして絵本が用いられた。「経験の拡大」に属する文献では、文献内におけるワークショップで絵本を用いることで、参加者に物語を疑似体験させ、彼らの経験イメージを拡大させていた。「プロ作家の育成」に属する文献では、プロ作家の育成を目的として絵本制作を行っていた。「その他(ハウツー、宣伝、その他)」には、ワークショップ実施の記述が見られない文献などを分類した。

表2に、全47文献が発表された1987年から2018年までの各年で、どのカテゴリに何件の該当があったかをまとめた。初めての文献は「表現」で1987年に登場し、その後しばらく間が空いて、2001年に「別テーマ(伝達、調査、啓蒙)」で2件目が現れている。2002年には再び0件となるが、翌年からは2005年を除いて毎年何らかの文献が発表されてきたことがわかる。年別合計数を見ると2003年から2018年までの16年間は、2005年以外で年に2～5件が見られた。

	1987	1988	1989	1990	1991	1992	1993	1994	1995	1996	1997	1998	1999	2000	2001	2002
別テーマ(伝達、調査、啓蒙)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0
論文番号 ※以下同															2	
表現	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
活動の一部	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
再現	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
導入	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
検討の対象	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
読み聞かせの道具	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
参考例	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
まとめ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
経験の拡大	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
プロ作家の育成	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
その他(ハウツー、宣伝、評論、その他)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
年別合計	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0

	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
別テーマ(伝達、調査、啓蒙)	0	0	0	1	0	1	1	2	0	0	0	1	1	1	0	1
論文番号 ※以下同				10		13	19	23,24				35	40	43		46
表現	2	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	0	0	2	0
活動の一部	4,5	8	0	0	0	2	0	21	2	0	0	36	0	0	44,45	0
再現	1	0	0	0	0	0	0	25,28	1	1	0	0	0	0	0	0
導入	6	0	0	0	0	0	0	0	29	34	0	0	0	0	0	0
検討の対象	3	0	0	0	0	0	1	0	31	0	0	0	0	0	0	1
読み聞かせの道具	7	0	0	0	0	1	0	18	0	0	0	0	0	0	0	0
参考例	0	0	0	0	0	0	0	22	1	0	0	0	0	0	0	0
まとめ	0	0	0	0	0	0	0	0	32	1	0	0	0	0	0	0
経験の拡大	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0
プロ作家の育成	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	42	0	0
その他(ハウツー、宣伝、評論、その他)	0	0	0	1	2	1	1	0	2	1	1	1	3	0	0	0
年別合計	4	2	0	2	3	5	3	4	4	3	3	3	4	2	2	2

表2 47文献のカテゴリ別の出現年

図1と表2の結果を重ねて言えるのは「別テーマ(伝達、調査、啓蒙)」と「表現」の2カテゴリが目立って多く、また全文献の出現期間において満遍なく現れていることだ。これは一般の研究で、絵本の担う役割と捉えられているのがこの2点であることの裏付けになるだろう。絵本は、何か別のテーマに気づかせたり踏み込んだりするための手段として認識され、一方でそれを作る作業は比較的ハードルが低いと考えられており、作られた絵本作品は人の内面を可視化する道具として有効だとも認識されていると言える。

4. おわりに：両方の先行研究検討からの考察

絵本学会研究紀要における文献群と、CiNii 検索における文献群で、絵本関連ワークショップの先行研究を調査、分析した。

両者の検討結果で共通するのは、ともに2000年以降で主要な流れが始まっていることである。わが国の研究において、絵本関連ワークショップが話題として登場するのは2000年前後からと判明した。しかし、絵本研究の代表的な場である絵本学会研究紀要の群と、一般的な研究の場を表すCiNii検索の群とでは、絵本関連ワークショップや絵本(あるいは絵本の概念)に対する認識に差が見られることもわかった。絵本学会研究紀要の群では、2005年の2件目の文献以降で絵本を人の内面に働きかける可能性を持ったものとして捉える姿勢が一貫しており、それを用いた絵本関連ワークショップは人間の思考を捉えて表現させたり、理解を深めようとする傾向が見られた。それに対しCiNii検索の群では、絵本(あるいは絵本の概念)を手段として捉える色合いが強く、そこで扱われる絵本関連ワークショップにおいても、絵本や絵本の概念の役割は手段として限定的に捉えられる傾向が見られた。両者の間には、研究にあたる各論者の、絵本への関わり方の立ち位置の違いや、それらを用いた活動へのそもそもの位置づけ方に違いがあると推測される。

今回の結果は、わが国における絵本関連ワークショップ研究のこれまでを俯瞰するものとなった。2つの対象群ともに、比較的良好に論じられ深められてきたテーマ(あるいは手法)と、そうでないものが存在するとわかったことは、これから該当研究にあたる研究者がどの方向へ自身のテーマの舵をとるかの判断材料になる。その選択は同時に、今後の絵本関連ワークショップ研究全体の進む道を決定するものであり、どの方向に力が入られるべきかを考えるという新たな課題の誕生を意味する。また、絵本研究を代表する場と一般の研究の場とで、絵本(あるいは絵本の概念)の捉え方や位置づけ方が大きく異なることについても、両者がその溝の存在をどう扱うかが新たな課題として浮上したと言え、引き続き観察していく必要がある。

注

- 1) 東京都の小平市、東村山市、清瀬市、東久留米市、西東京市の5市による、文化事業や図書館の相互利用などのサービス提供組織「多摩北部都市広域行政圏協議会」が、2015年度から行うワークショップ。5市内に在住・在勤・在学する障害者を対象に、作品制作の場が毎年設けられ、事後には展示やコンテストも行われる。
- 2) 2017年9月2日から2018年3月18日の期間に、保谷こもれびホールにおいて全27回開催された映画制作ワークショップ。プロの映画監督を招き、市内に在住・在勤・在学する一般受講者24名が参加。参加者らが映画制作に必要な役割を各々で担い、地域映画「つなぐ人」を完成させた。

参考文献

香曾我部秀幸・鈴木穂波,2012,『絵本をよむこと「絵本学」入門』翰林書房.

三好伸子,2017,「保育者養成校授業における絵本の効果—『おこだでませんように』を読む学生の視点—」『絵本学会研究紀要「絵本学」』19号,絵本学会.

三好伸子,2018,「『さっちゃんのまほうのて』を学生同士が読み合う効果—保育者養成校のレポート記述の分析—」『絵本学会研究紀要「絵本学」』20号,絵本学会.

村中李衣,2004,「絵本とはなにか」『新・こどもの本と読書の事典』ポプラ社.

永井雅子,2018,「哲学的なテーマのある現代絵本の可能性—大人と子どもが『ぼくのニセモノをつくるには』を対話的に読む—」『絵本学会研究紀要「絵本学」』20号,絵本学会.

中野民夫,2001,『ワークショップ—新しい学ぶと創造の場—』岩波新書710,岩波書店.

杉浦篤子,2005,「美術へのアプローチとしての絵本の可能性」『絵本学会研究紀要「絵本学」』7号,絵本学会.

竹内由子,2000,「現代タイ絵本の概況」『絵本学会研究紀要「絵本学」』2号,絵本学会.

絵本学:絵本学会研究紀要

	タイトル	著者	号数	該当頁	メモ
1	伝承文芸の構造とモーリス・センダックの物語構造の類似性-センダックが父親から受け継いだもの-	藤本朝巳	1999-No.1	5-12	センダックの作品群における物語の構造を、北米インディアン民話の構造を例にとり分析。さらにセンダックの父の語りの影響に着目し、父の著作In grandpa's houseの構造とセンダックの作品群との共通点を見出して、関連性を述べている。
2	絵本の表象論 SENDACKの絵本論 「絵本」と「子供」について 前編	申 明浩	1999-No.1	13-40	センダックの作品のうち、特に「かいじゅうたちのいるところ」「真夜中のだいごころ」「まどのそと」の3作品について、そこに描かれる内なる子供、恐怖と欲望について述べる。また月、窓、マンハッタン、そしてレイアウトの特徴に触れ、さらに愛身、大人の世界と子供の世界にも触れることで、各モチーフや技法に込められた意味を分析する。必要以上に抽象度の高い表現が多く、文章の意図を読みとりにくい。
3	同上、後編	申 明浩	2000-No.2	27-58	※2号に渡り前編、後編で掲載
4	絵雑誌『コードモクニ』の研究～出版・編集のサイドから～東京社の創業者であり、編集責任者であった鷹見久太郎(思水)家にある資料と彼の人物、仕事をとおして	鷹見本雄	1999-No.1	41-51	コードモクニの創刊前の事情から、その実態を述べる。倉橋惣三についての記述もあり。
5	絵本を使った英語学習 -スピーキング能力を向上させる-	磯崎京子	1999-No.1	53-58	英語学習について、言語学者ステファン クラッシェンの三原則に則って述べ、それには絵本の絵の「気づく」要素が貢献していると述べる。絵本の選び方、授業の手順についてもくわいたきな記述あり。
6	外国絵本の教材としての効用とこれに伴う教師の教材観及び指導意識分析 -幼稚園・小学校低学年における外国絵本の活用-	金澤延美	1999-No.1	59-65	国際理解、いまじねーしょん育成に効用のある絵本をそれぞれ1冊ずつ選択し、特に後者では読み聞かせ時の小学4年生と女子短大生の反応を比較。また外国の絵本を英語学習に使うことについての意識調査をしており、対象者は幼稚園教諭、小学校教諭、父母。絵本に興味をもつが、学習に役立つとの意識が乏しいとの結論。
7	研究ノート「絵本とはなにか」を考えるに当たっての基礎的諸問題の整理	千田 篤	1999-No.1	67-73	引用などが極めて少なく、一般書の域を出ないが、ただし述べられている問題点はどれも確。項目としての引用は可能性がありそう。
8	創業期の金井信生堂刊行絵本 -1908(明治41)年初版発行絵本を中心に-	大橋眞由美	2000-No.2	5-24	標題の赤本絵本13冊についての制作の実態と考察。鱗木清方や石井桃子などの子供時代の回想の引用あり。
9	小型本シリーズ"Dumpy books for Children" の分析 -絵本の歴史にはたした役割-	三宅興子	2000-No.2	59-71	シリーズにおいて、絵を用いたちびくろさんぼの売り上げが突出したことで、絵本へと明確に路線変更した点や、ちびくろさんぼの表現の特異性について述べる。シリーズ全体の内容に触れた上で、白人至上主義の有色人種の扱いにも言及している。書き方の手本となる論文だと思う。
10	現代タイ絵本の概況	竹内由子	2000-No.2	73-85	現在のタイにおける絵本の状況を述べる。発展途上で絵本への理解が遅れていること、その理由は絵本を親世代が目にしていないことやタイ独特の文化であることを指摘。まったく触れられてはいないが、絵本学会研究紀要においてはじめて「ワークショップ」の言葉が使用された(77ページ、右段上方)。
11	金井信生堂刊行「吉田一徳編」の絵本 -戦時統制との関係を中心に	大橋眞由美	2001-No.3	5-17	戦時統制下の金井信生堂の絵本で、吉田一徳編と記された33冊について。吉田が編集に招かれた経緯とともに、編集方針の具体を述べる。33冊以内には佐藤忠良(初出1942年ウシワカフムラ)の著者名がある。
12	センダックの小型絵本Pierre論 -「教訓物語」を逆転させる構造	小澤佐季子	2001-No.3	19-29	センダックのピエールを、作品の構造と形態、文字の伝統、子どもの心理の視点などから分析。かいじゅうたちのいるところの前段階として重要な作品と位置付ける。
13	絵本は父親をどのように描いているか -心理学的分析試論	佐々木宏子	2001-No.3	31-40	国内外の絵本から、父親を描いたもの422冊を対象に、何が語られているかを分析。アメリカやヨーロッパの絵本が豊かな父子関係を描く一方で、日本のものはそうではない。特に、子どもと遊ぶ父親、生き方をかんがえさせる父親の2点は皆無と言える。
14	「ナンタン」の言葉遣い -絵本における言語の特性と機能	笹本 純	2001-No.3	41-48	ナンタンあそぼうシリーズの全10冊について、テキストの特性を述べる。6点の特徴を指摘し、絵本テキスト一般に必ずしもあてまらないとしながらも、極端な部分に本質が表れることは多いと筆者は述べる。面白いし、独自の視点ではないが、絵本の言葉について、瀬田良二、松本猛、長谷川周平が言及していることに注で触れている。内田麟太郎の著書にも触れている。
15	研究ノート:林明子の絵本表現 『はじめてのおつかい』から『こんとあき』へ	内海幸代	2002-No.4	5-12	標題の2冊を比べる根拠として、筆者の在籍する読み聞かせ文庫での貸し出し状況のみを引き合いに出しており、比較理由もそれによるのだが、そもそもその設定に疑問を感じる。1つの事例だけでは予測に不十分なのではないか。全体として、2冊のうち前者は技法として不足しており、後者が優れているという論調での比較となっている。
16	報告:日本で出版された西遊記絵本に関する一考察	手 順	2002-No.4	13-25	1930年～2000年までの日本で出版された西遊記絵本をリストアップしている。作者の国籍別、再話パターン、その他特徴別に対照群をカテゴライズしている。
17	研究ノート:「食」から見た絵本についての一考察 -子ども文庫の実践から	鈴木穂波	2002-No.4	27-35	食に関する絵本の具体例を数冊出し、食についてどう描かれているかが主観のみによって語られる。
18	講演:絵本の翻訳と文化の根っこ	三宅興子	2002-No.4	37-47	英語と日本語の、相互の翻訳についての関連した態度の指摘と、文化の研究の上に立った真摯な翻訳を目指すべきとする講演記録。読み応えあり、引用対象としても有効と感じる。

19	論文:未刊絵本『ウシカフス』を巡って	大橋真由美	2003-No.5	5-18	GHQによる禁禁処分を受けた掲題絵本について、ブラザグ文庫内の当時未公開資料を採り、経緯と、誤解の発生源を述べる。掲題本の作者の一人には吉田一穂があり、金井信生堂について書いた前号の論文(著者同一人物)とリンク。佐藤忠良のウツカフスらの記述もあり。
20	論文:絵本の表現構造	中川素子	2003-No.5	19-32	絵本における表現を、構造別に分類している。2Dの世界、つまりこの論文でいうところの直線構造のみで考えがちな絵本だが、その他にもこんなに多様な分類とその具体例があるということを知ることができる。
21	論文:佐藤忠良と内田莉紗子によるロシア昔話絵本-ロシア・イメージの伝達についての一考察	丸尾美保	2003-No.5	33-46	掲題の2作者による『おおきなかぶ』『ゆきむすめ』『べべやガーシーのとり』の3作について、詳細な観察と引用による作品理解の上で、文化伝達における問題点を指摘。「日本人がロシアに対して持っているcodeとconventionが利用されて描かれたのである」と筆者は述べる。さらにロシア出身者4名への聞き取りで、作品内に現地の人が違和感を感じる部分も挙げている。
22	研究ノート:「科学絵本」という呼称についての歴史的研究 -1868～1950年の児童書の調査から	龍川光治	2003-No.5	47-57	科学絵本という言葉の歴史を追う。1937年に使われ始め、1943年『絵本の研究』出版のころに普及したと述べる。
23	報告:編集者とは何者か	澤田精一	2003-No.5	59-66	福音館書店の編集者、澤田精一による報告。論文の形式は全くとっていないのであくまで報告の域を出ないが、編集者の仕事についての一部始終を具体的な例をとって記録したことには一定の意味があると言える。大竹伸朗・ジャリおじさん、スズキコージ・きゅうりさんあふないよの2冊についての言及あり。
24	報告:「絵本画家による絵本論」文献解題	大橋 滋、小澤佐幸子、金 永順、廣田真智子、正置友子、丸尾美保、三宅真子	2003-No.5	67-73	絵本画家による絵本論の文献リスト。
25	大正期における一少年の絵本コレクション-札幌市中央区図書館所蔵「池田コレクション」の絵本、その概要と意義-	大橋 真由美、相川美恵子、石川順子、大橋 正置友子、丸尾美保、香曾我部幸幸、正置友子、丸尾美保、三宅真子(日本絵本史研究会)	2004-No.6	1-14	大正期の絵本について、赤い鳥以前の概略を追い、その上で掲題のコレクションの位置付けを述べる。本コレクションは大正期の少年の絵本体験をほぼそのまま封じ込めたものといえるといっている。
26	赤羽末吉による中国民話絵本についての一考察	手 頼	2004-No.6	15-28	日本において日本人画家が中国を描いた絵本は52冊あり、そのうち8冊が赤羽末吉の手によると指摘。それには赤羽の中国滞在経験が影響すると述べた上で、8冊のタイトルについて個々に考察。その特徴として、壮大なロマンティズムへの賞賛、情緒の表現に重きを置く写実の手法で絵本の総体性やドラマチックな構成を追求したことと2点を挙げた。
27	論文:原書と翻訳絵本に関する一考察 『おかあさんのたんじょう日』について	成田順子	2004-No.6	29-36	『おかあさんのたんじょう日』『くまさんにきいてごらん』を取り上げ、テキスト、絵の両方について、翻訳版になるとどう違っているかに言及。翻訳段階でテキストだけでなく、絵にも変化の可能性があると指摘。
28	報告:絵本原画展・図録 文献解題	内海幸代、大橋 滋、小澤佐幸子、金 永順、廣田真智子、正置友子、丸尾美保、三宅真子(梅花女子大学大学院絵本振替ゼミ作成)	2004-No.6	37-53	1970年代～2001年までの絵本原画展で、有用なものをリストアップ。その後続くのは、1970年代～2001年までの絵本関連の展覧会図録で10ページ以上、図版ありのものを一覧にしたもの。
29	報告:2003年度絵本参考文献目録(2002年10月-2003年8月発行分)	内海幸代、大橋 滋、小澤佐幸子、金 永順、廣田真智子、正置友子、丸尾美保、三宅真子(梅花女子大学大学院絵本振替ゼミ作成)	2004-No.6	55-60	掲題の年度における、単行本・図録・創刊雑誌、紀要論文をリストに。
30	大正期における一少年の絵本コレクション-札幌市中央区図書館所蔵「池田コレクション」の絵本、その概要と意義-	丸尾美保、相川美恵子、石川順子、大橋 真由美、内田美鈴、香曾我部幸幸、正置友子、三宅真子(日本絵本史研究会)	2005-No.7	1-17	前号で扱った同コレクションの、絵本誌に著目した研究。キンダーブック以前にあった大正期の絵本誌は、この論文以前ではあまり取り上げられることがなかったが、キンダーブック以外の様々な絵本誌をとりあげている。全体の構成の傾向、しきりについて、印刷、読み物の内容、読者、当時の批評、表紙のモチーフと描き方の変遷、コレクション主の横一郎くんの読み跡への言及、当時の社会背景に言及している。
31	エヴゲーニイ・ラチョフの動物民話絵本考	田中友子	2005-No.7	19-31	1947年にロシアで出版されたラチョフ挿絵の『バシキール民話集』で、ラチョフがはじめて動物に服を着せて作画したことをテーマに論述。ラチョフ自身の児童書画家としての出発のころから、動物画を売りにするに至るまでの経緯を述べ、さらに前後のロシア社会背景情勢に言及して、なぜ前述の作画が物語を醸したかを述べる。ラチョフ自身は民話をより正確に伝えるためにこの手法をとったと述べる。
32	美術へのアプローチとしての絵本の可能性	杉浦篤子	2005-No.7	33-44	絵本を用いたワークショップ的な話題が紀要ではじめて登場。美術の苦手な者の多い保育学科の学生を対象に、絵本が美術鑑賞の克服に役買うのではないかと論を繰り広げる。
33	報告:絵本論 文献解題	金 永順、中川素沙美、大橋真由美、廣田真智子、丸尾美保、三宅真子、丸尾美保、三宅真子(梅花女子大学大学院絵本ゼミ作成)	2005-No.7	45-57	1943年～2001年までの絵本論における重要図書について、文献解題を行なっている。後半には絵本について書かれた理論書を網羅するリストが付録。
34	報告:2004年度絵本参考文献目録	金 永順、中川素沙美、大橋真由美、廣田真智子、丸尾美保、三宅真子、丸尾美保、三宅真子(梅花女子大学大学院絵本ゼミ作成)	2005-No.7	59-65	2003年9月～2004年8月に発行された絵本研究の参考文献リスト。単行本・図録、紀要論文に分かれる。
35	大正期における「歴史絵本」にみられる特色-札幌市中央区図書館所蔵「池田コレクション」を中心に-	香曾我部幸幸、石川順子、大橋 真由美、正置友子、丸尾美保、三宅真子(日本絵本史研究会)	2006-No.8	1-18	池田コレクションより、大正期の歴史絵本を特に見たもの。特によく取り上げられた人物や、歴史絵本出版の背景にふれ、それらが忠君愛国などの政府の意図する政策や方向性を純粋に反映し、かつ世相の受けを据って作られたものであり、歴史的な意味に主眼を置いていないと結論づけた。対象絵本の一覧あり。
36	子どものイメージと童画『コトモクニ』の武井武雄・岡本帰一・初山滋の場合	神林淳子	2006-No.8	19-29	大正期の童画について、特に掲題の3名を取り上げて、描かれている子ども像を分析。童画の子ども観の見出しで、童話、童謡、童画の大正期における成立についても触れている。

37	宮澤賢治の童話を原作とする絵本におけるイメージの図像化 ー言語表現に基づく画像形成としての絵本制作の研究ー	佐本純	2006ーNo.8	31-45	宮沢賢治のテキストをもとに絵本化した作品を複数比較し、賢治テキストのもつ不特定性と、具体的な例を示す。注3に動物の擬人化に関する参考文献の提示あり。矢野晋司『動物絵本をめぐる冒険 動物ー人間学のレッスン』助草書房
38	古閑下に出版された『桃太郎』をめぐって ーブランク文庫所蔵絵本を中心にー	谷咲子	2006ーNo.8	47-60	ブランク文庫に所蔵の桃太郎29冊について、体裁や内容についての概要を提示。29冊を一覧表にしたものと、さらにその物語の構成を分析した表をつけている。GHQによる検閲の趣旨を述べた上で、検閲という行為の矛盾や偏りを指摘。
39	研究ノート 日本のバリアフリー絵本 ーその現状と可能性ー	龍(覚は旧字)上久子	2006ーNo.8	61-67	日本におけるバリアフリー絵本の制作スタートから現状を述べ、さらに購買者の数の少なさによる供給の少なさという問題点を指摘。
40	報告:北海道におけるブックスタート事業等の現状と課題	柴村紀代	2006ーNo.8	69-74	北海道でのブックスタートの、論文掲載時までの状況と、予算がおりにくい自治体では導入も難しいことや、ブックスタートの仕組みを使わない独自の取り組みがあることなどにふれた。北海道のブックスタート要綱と、実施市町村についての分類表あり。
41	報告:絵本史 文献解題	小澤佐幸子、中川亜沙美、西脇由利子、廣田真智子、丸尾美保、万本美穂、三宅麻子(梅花女子大学大学院絵本専攻ゼミ作成)	2006ーNo.8	75-84	西洋、日本の絵本史について述べている文献を、書籍、論文の両方でリスト化。
42	報告:2005年度絵本参考文献目録	中川亜沙美、西脇由利子、廣田真智子、丸尾美保、万本美穂、三宅麻子(梅花女子大学大学院絵本専攻ゼミ作成)	2006ーNo.8	85-92	2004年9月～2005年8月に発行された関連文献のリスト。単行本・図書、図書、紀要論文。
43	『コドモノクニ』の童画とは、ウィルビー・ル・メール ーイメージの伝承とその意味ー	神林(坂本)淳子	2007ーNo.9	1-13	コドモノクニで活躍した本田庄太郎、鈴木武、武井武雄、岡本帰一などの画家の絵と、ル・メールらの絵を具体作品で対照し、類似点を指摘。ビクトリア朝的な教訓の投影される後者の絵に対し、それを参照したと考えられる前者は、そこを子どもの遊びへと変換していることや、日本と西洋での文化的な相互影響について、東西の子どもの観についてが述べられている。
44	Mother Goose 絵本における月の図像の変遷について ーHey diddle diddle…の場合ー	西脇由利子	2007ーNo.9	15-28	イギリスと日本で描かれた掲題の絵本における、月の図像がどう変化してきたかを考察。
45	絵本空間の想い出 ー「絵本に関する想い出」調査からみた、絵本受容の諸相およびその意義ー	大橋眞由美	2007ーNo.9	29-40	大正・昭和初期生まれの5名に絵本の記憶を開き調査した記録。絵本そのものを思い出す以上に、その絵本を読んだ状況や人の想い出、年齢を重ねてからの事象とのリンクなどが語られる。
46	研究ノート おやゆびひめとThumbelina ー絵本に見る文化的差異と普遍性ー	前沢明枝	2007ーNo.9	41-52	アンデルセン童話のおやゆびひめについて、アンデルセンによる初版に挿絵を描いたヴィルヘルム・ペーザセンの描き方にふれた上で、日本と欧米の23冊を比較。普遍的に表現される部分と、所属する文化などによって変化する部分を指摘。
47	研究ノート 日露戦争の絵本に描かれたロシア及びロシア人 肖像	丸尾美保	2007ーNo.9	53-64	日露戦争中に発行された絵本、ボンズ絵で、日露戦争を描いたものを集めている。実物を確認したものとして前者15冊、後者13冊、いずれも敵国ロシアを弱々しいもの、日本を勇ましいものとして描いたと述べる。
48	報告:2006年度絵本参考文献目録 (2005年9月-2006年8月発行分)	永田桂子、丸尾美保	2007ーNo.9	65-75	例年に同じ。
49	子どものイメージとモダニズム ー『コドモノクニ』の童画の諸相ー	坂本淳子	2008ーNo.10	1-13	1922年創刊の『コドモノクニ』について、その童画群がモダニズムに裏打ちされたもの(民主主義や産業革命の結果としての大衆社会、大量モノ社会の到来によって、子どもの表現もそれを後押しする内容になった)だった点や、日露戦争時には(生活や美的感覚を押し出したものではあるが)銃後を守る意味合いの絵柄が見られた点など、時代に沿った変革を遂げているとした上で、その後にはロシアアバンギャルドの影響が幾人もの画家にみられたことを挙げ、その後の日本絵本へのよい影響になったことを指摘している。
50	絵本の物語構造に関する研究 ー「行きて帰れし」物語と子どもの絵本体験ー	生駒幸子	2008ーNo.10	15-28	『かみ・じゃうちのいるところ』『めづきもくらどおんどん』の2冊を比較して、これら「行きて帰れし」物語の共通点と相違点を挙げる。さらに母親の登場や、行くところと帰るところの意味について論じ、読み手である子どもの自己感確立に影響すると指摘する。
51	ましませつこのわらべうた絵本について ーこぐま社との出会いー	廣田真智子、中川亜沙美、西脇由利子、丸尾美保、万本美穂、渡邊万由美((こぐま社の絵本)研究会)	2008ーNo.10	29-41	ましませつこのわらべうた絵本について、1～4期にわけ、わらべうた絵本の新しさ、絵本模範時代、こぐま社と創る親子のうたのえほん、乳幼児のわらべうたえほんとそれぞれ名付けて検討している。調査の土台に独自の聞き取り書簡を据えており、内容を末尾で実際に見られる。
52	長新太のナンセンス	今田由香	2008ーNo.10	43-52	長新太の作品がナンセンスと呼ばれることに対して、ナンセンスとは何か、さらに長新太のナンセンスとは何かを考察する。文学におけるナンセンスの定義を確認した上で、長新太のナンセンスにはシュールレアリスム、アニメズム、笑いがあることを指摘。読者をとりこむ作品特徴があり、そこで語られるのは世界の可能性であるとした。
53	【論説】『エマおばあちゃん』が描くポジティブ・エイジング ージェンダー化したエイジングを生きる「おばあさん」考ー	大町幸奈	2008ーNo.10	53-58	『エマおばあちゃん』での主人公を通して、おばあさんという存在のジェンダーに囚われたありようと、そこから脱した主人公の示す新たな価値について述べる。日本の絵本「しにがみとおばあさん」との比較も試みている。
54	報告:2007年度絵本参考文献目録 (2006年9月-2007年8月発行分)	永田桂子、丸尾美保	2008ーNo.10	59-72	例年に同じ。

55	画家・木葉井悦子の仕事 ―大地といのちが描かれた軌跡―	磯村あづさ	2009―No.11	1―13	木葉井悦子の画業全体、つまり絵本17冊に加えて、膨大な数残されたタブローなど、すべてを含めて分類し特徴を述べている。2000年に谷口歌子(母)が軽井沢絵本の森美術館を訪れ、木葉井の絵画など1500点と画材などのコレクションを寄贈したことがきっかけで、筆者は展示と本論文執筆をした。
56	絵雑誌に描かれた“遊びのイメージ” ―「池田コレクション」を事例として―	大橋眞由美	2009―No.11	15-28	池田コレクションを、「遊びのイメージ」から眺めたもの。コレクション中の絵雑誌に描かれた遊びのイメージには、四季の別、時代性、遊びの場、遊びの道具、遊びの参加者のかき分けが見られ、そのことは西洋文化の導入やジェンダー区別を示し、読者である子どもに向けて再生産された「イメージ」であり、読者らが構築する次世代の社会動向に影響を与えたといえるとは筆者は指摘する。
57	手島圭三郎絵本―木版画による幻想表現― ―発想の原点としての北方風土―	杉浦篤子	2009―No.11	29-40	木版の絵本作家、手島圭三郎について、その全作品(当時)30作弱を、3つの期に分けている。筆者によれば第1期は絵本という形態に興味をもって取り組んだ時期、第2期は物語性に重きが置かれた時期、第3期は物語性と写実に裏打ちされた適格な表現の時期。
58	光吉夏弥研究(第1期) ―(岩波の子どもの本)編集までの子どもの本に関わる仕事―	生駒幸子	2009―No.11	41-53	光吉夏弥について、岩波の子どもの本に携わる以前の児童書物関連の軌跡を追う。(間違って以降については、第2期研究としてまとめるとの記述あり。)生い立ちから1952年までの動きをまとめた詳細な年表あり。翻訳、編集、評論、著書の別も表内にすべて書かれている。
59	トミー・ウングラーが取り組む“両義性”という主題 ―『すてきな三にんぐみ』『ゼルダと人喰い鬼』『あたらしいもたち』の分析研究―	今田由香	2009―No.11	55-66	作絵ともにウングラーによる3冊の絵本を取り上げ、その両義性を指摘。具体的な描写としては、光と闇、喰うものと喰われるもの、ガラタとアートといったモチーフがあり、社会の片隅に生きるものが恐れを持たない他者によって開眼するストーリーの中で、これらが示される両義性が語られると述べる。最後に筆者は、ウングラーの少年期に触れ、両義的なものの見方を獲得した経緯を推察している。
60	報告:2008年度絵本研究参考文献目録 (2007年9月―2008年8月発行分)	永田桂子, 丸尾美保	2009―No.11	67-78	例年に同じ。
61	エロール・ル・カイン 絵本における絵と文字テキストの関係 ―『いばらひめ』をめぐって―	石原敏子	2010―No.12	1-12	掲題の絵本について取り上げ、原典をグリム童話1812版にしていることや、抽象度の高い絵と文字テキストとの密接な関連を指摘。
62	絵本に見る“暮らしのイメージ” ―金井信生堂の創業期絵本(1908―23)を事例として―	大橋眞由美	2010―No.12	13-25	掲題の絵本群を引き合いに出し、絵本に見る都市風景、乗り物、住空間、家族イメージなどに時代の特徴が見られると指摘。当時のかわら版などと同様、絵本も近代日本の暮らしの伝え手だと解く。良妻賢母や性別役割分業などが繰り返し描かれることにより、画一化された近代家族の暮らしのモデルを提示し、近代国家が建設されるのに重要な影響を与えたとしている。
63	『わたしのワンピース論 ―その特質をめぐって―	西脇由利子, 中川亜沙美, 廣田真智子, 丸尾美保, 立本光恵, 渡邊万由美, 三宅舞子(こぐま社の絵本)研究会)	2010―No.12	27-39	西巻茅子氏が作絵ともに担当した絵本群を引き合いに出し、主人公、色彩、画面展開、空間表現、テキストといった特徴を分析するとともに、その中でも『わたしのワンピース』は群を抜いた作品と位置づける。子どもたちの反応について、作品間の比較でそれを述べている。また、まとめでは、『わたしのワンピース』が制作された当時の出版界の様子にも言及がある。
64	(岩波の子どもの本)出版の歴史的検証資料と 光吉夏弥の業績(第2期)資料の研究	生駒幸子	2010―No.12	41-50	掲題のテーマについて、岩波の子どもの本の配本リスト、出版の経緯に関する年代順の資料リスト、出版の評価に関する資料リストの3点をあげ、さらにそれぞれの中で注目すべきものをピックアップして言及している。岩波の子どもの本の概要についての、根本的な資料となる文献。
65	子育て支援としてのブックスタートの可能性と課題 ―北海道恵庭市の調査結果を通して―	梶浦真由美	2010―No.12	51-57	北海道恵庭市で8年が経過した時点の、活動のこれまでと現状、活動から見出せたデータを開示している。課題として、父親の育児参加をブックスタートによって促すことがあると述べる。
66	幼稚園における集団への絵本の読み方が幼児の身体的・言語的反応に及ぼす影響	並木真理子	2010―No.12	59-68	4歳児、5歳児を対象に、談々と読む、狩猟をつけて読むの2方法を実行した実験の結果報告。どちらが絶対的にいいとは一概に言えず、年齢と望ましい発達の状況を考慮して適宜用いられるべきだとしている。
67	報告:2009年度絵本研究参考文献目録 (2008年9月―2009年8月発行分)	永田桂子, 丸尾美保	2010―No.12	69-80	例年に同じ。
68	大人を導く子どもの登場 ―T.ウングラーのニューヨーク時代の絵本を読む―	今田由香	2011―No.13	1-11	ウングラーの1956〜71年におよぶニューヨーク時代について、出版された20冊を手がかりに、成功の背景(理解者が存在し、チャンスに恵まれた時代であったこと)、絵本から離れた原因と復帰、作品中の登場人物の分析を述べる。ウングラー作品では子どもが大人を変える媒として描かれると指摘。
69	Plenty to Watch論	岩佐優子	2011―No.13	13-25	アメリカで活躍した絵本作家、八島太郎の、1950年代に当地で刊行された掲題作について、全ページに渡り詳細な読みを並べで行なっている。日本を離れた日本人が、少年時代の思い出だけをベースに制作しており、事実と異なる細かな描写(豆腐の作り方)や、当時のアメリカ出版界で望まれた描き方をするために日本の状況と違うもの(男女が並んで歩く)を含みながらも、精緻な表現で日本を語り継ぐ作品として評価している。
70	縦開き絵本の研究	笹本純	2011―No.13	27-36	縦開き絵本30冊を集め、分析。①縦開き絵本には上開きと下開きがあり、両者は機能上の差異があること②高さ・深さの表現や上下運動の表現に有効③同一構図を反復するタイプと長い画面の部分を見せるタイプがある④冊子本以外でも多様な可能性をもつという4点が指摘された。
71	研究ノート: 光吉夏弥研究 第3期(1969年〜没後出版)調査 ―戦後絵本史における絵本研究の萌芽―	生駒幸子	2011―No.13	37-48	光吉夏弥について、連続研究の最終回。掲題の時期に関わった文献の一覧あり。
72	研究ノート: 北海道恵庭市におけるブックスタートの検証 ―母親からの聞き取り調査を通して―	梶浦真由美	2011―No.13	49-56	北海道恵庭市でのブックスタート1期の母親15人に、8年後に聞き取り調査したものを分析。①乳幼児連れて図書館を利用する家族が増えた②絵本がコミュニケーションの有効手段となった③子どもの本好きや活動育成、子育てにおける親のストレス軽減につながった④絵本の読み聞かせに消極的な母親の共通点としては子どもが3人以上いて母親自身が幼少時の読み聞かせを体験していないことが多いの4点が判明。母親だけに焦点をあてているのが気になるが、絵本をなぜ読むべきかのバックアップ資料として意義がある。

73	報告:2010年度絵本研究参考文献目録 (2009年9月～2010年8月発行分)	永田桂子, 丸尾美保	2011-No.13	57-69	例年に同じ。
74	研究論文:絵本で描かれた「音」の原風景 ー「ぼくがうまれた音」考ー	石井光恵	2012-No.14	1-12	2009年ブラティスラバ世界絵本原画展で金牌賞を受賞した『ぼくがうまれた音』について、編集者唐亜明へのインタビューも参考に、背景を探る。国内(あるいは発刊当時の編集部内)の反応も論者が受け止めつつ、あえて話題にしていると冒頭で断っている。
75	研究論文:八島太郎のモモ三部作に見る精神の軌跡 ー恋の図像に着目してー	岩佐優子	2012-No.14	13-25	八島太郎のアメリカにおける絵本三部作を通して、恋というモチーフのもつ意味を考察。
76	研究論文:島田ゆか「バムとケロ」シリーズにおけるインタラクティブ性	鈴木穂波	2012-No.14	27-39	「バムとケロ」シリーズを、一人の読者が楽しむためのインタラクティブ性を備えた作品と捉え、その性質の内訳が何であるのかを指摘する。それは具体的には、登場人物(バムとケロ以外のサブキャラクター含め)であり、画面展開における工夫であり、作家による細かな世界の構築であると述べる。絵本を「インタラクティブ」の側面からはっきり捉えた論文は、本紀要内では初めて。また、この論文で見られる「インタラクティブ性」はどの表現に宿っているか、その部分の指摘は、抽象的になりがちな絵本表現の分析を打破するものだろう。特に表1のような構図の図式化は、わかりやすい方法だと感じた。
77	研究論文:おとぎ話化された宗祖伝絵本『絵本空海 お大師さま』	森 寛	2012-No.14	41-52	仏教絵本『絵本空海 お大師さま』について、成り立ちや絵本作家・梶山俊夫の起用などについて述べる。
78	研究ノート:『11ぴきのねこ』論 ーキャラクターの分析を中心にー	中川麗沙美, 西脇由利子, 廣田真智子, 丸尾美保, 方本光恵, 飯邊万由良, 三宅真子	2012-No.14	53-64	『11ぴきのねこ』について、各見開きの構図などの分析をした上で、キャラクターの分析(11ぴきである理由、猫である理由など)、さらに集団行動を基軸にした物語であることを述べる。その習慣のない欧米では、翻訳本が絶版になっていることにも触れる。
79	報告:大正期における一少年の絵雑誌コレクション・補遺	香曾我部秀幸, 丸尾美保, 三宅真子	2012-No.14	65-75	2005年3月発行の絵本学7号で発表した同様の研究後、新たに同コレクションの別の雑誌群が発見されたことをうけ、考察しなおしたものの。
80	報告:2011年度絵本研究参考文献目録 (2010年9月～2011年12月発行分)	永田桂子, 丸尾美保	2012-No.14	77-93	例年に同じ。
81	研究論文:『魔法のことば』考 ー成立過程と「言葉」の力ー	山下紗織	2013-No.15	1-12	絵本・魔法のことばについて、イヌイトの詩であること、松田素子、柚木沙弥郎の制作をたどり、そこに描かれるものについて述べる。読みやすく、論理展開も面白い。
82	研究論文:the three robbersの表現様式	今田由香	2013-No.15	13-23	トミー・ウングラーのすてきな三にんぐみについて、リュティの理論に基づき、テキストと絵を分析。テキストはヨーロッパ言語に近く、孤立性、平面性、極端性、固定性の様式を示す。また絵は、テキストのそれらの様式を保持した表現であると述べる。
83	研究論文:田島征三『ガオ』論 ー絵本における「生」の表現を探るー	鈴木穂波	2013-No.15	25-37	『ガオ』を論じるにあたり、自費出版の無絵本・しはてんからの経緯を辿りつつ、最終的にはガオで表現されるものはしはてんの時の消化不良の答えであると述べる。田島征三の絵本制作を貫いて見る。
84	研究ノート:モリス・センダックのポター論検証 ー削除された4枚のイラストレーションー	藤本朝巳, 永井雅子, 赤羽尚美	2013-No.15	39-46	ポターのピーターラビットが、私家版から商業版になるときに削除された4枚のイラストレーションについて、センダックが指摘した点を検証する。これに同意する一方で、センダックの指摘はイラストレーションの評価の枠を出ず、今後に向けた課題も多数あると論者は述べる。
85	報告:2012年度絵本研究参考文献目録 (2012年1月-12月発行分)	永田桂子, 丸尾美保	2013-No.15	47-60	単行本、図録・画集、報告・目録、雑誌、紀要論文ほかをリスト化。
86	研究論文:マリー・ホール・エッツのメキシコストーリー 『クリスマスまであと9日』考 ー絵本を通しての多文化・異文化理解の視点からー	梶(寛は旧字)上久子	2014-No.16	1-10	掲題の絵本について、エッツのプロフィールや制作エピソードをふまえて考察。主人公の人物設定が当時のメキシコの実態と異なることを、共作者もよく思わなかったこと、さらにその点を考慮することは現在において必要であることを指摘する。
87	研究論文:かぐいひろし『おふとんかけたら』論	鈴木穂波	2014-No.16	11-23	掲題の絵本の作り全体を細かに観察した上で、人間でないものの眼に焦点をあてることで眼の特質を鮮明に描き出していると述べる。はたらかかけ、体や内面を開く絵本の可能性をさぐる手がかりになると最後に触れている。
88	研究論文:「くまのアーネストおじさん」シリーズの絵本表現 ー言葉に依存しない表現指向に着目してー	山本美希	2014-No.16	25-36	ガブリエル・パンサンの掲題シリーズに着目し、テキストを極限まで省いた表現を観察する。作者がこのような方法をとるのは、読み手が絵本のなかで主体的に意味を見出すためであり、そのために作中では、言葉の使い方、絵の中の記号性、構図などが工夫されていると論者は指摘する。
89	報告:幼稚園・保育所において絵本はどのように扱われているか ー保育者への活動実態・意識調査からー	西坂小百合, 篠沢薫, 植藤桂子	2014-No.16	37-44	保育者の絵本への取り組みの実態と意識について、量的データを示す。
90	報告:絵本研究参考文献目録2013 (2013年1月-12月発行分)	永田桂子, 丸尾美保	2014-No.16	45-61	項目は前年に同じ。

91	研究論文: Mirror論 —スージー・リーの絵本の新しさを考える—	甲斐聖子	2015-No.17	1-11	ブックデザインを学び、理論提示を並行させて絵本制作を行うスージー・リーの、絵本『Mirror』を取り上げて論じる。作品では「のど」の存在を活用し、現実、鏡の世界、のどの前の世界、のどの奥の世界の4つを立ち上げていると述べた。インタラクティブ性で成り立つ新たな存在として論じている。
92	研究論文: 既存の物語を題材とする言葉のない絵本の研究 —「赤ずきん」絵本を例として—	山本美希	2015-No.17	13-25	ネームレスの「赤ずきん」絵本9冊を対象とし、それらがもつ特徴を観察した。すなわち、そもそも「赤ずきん」というテーマを選ぶことが非限定的な物語を描こうとする姿勢であり(ペローとグリムの別があるにしても、もとは口承物語であるため)、言葉を使わない場合に各作品ではどのような伝達方法をとっているか(語られない前史の追加、吹き出しの活用など)や、周知の物語であることを利用して新鮮な表現を生み出していること(物語の部分の大胆なカットなど)が特徴であると指摘した。
93	研究ノート: ローラ・インガルス・ワイルダー作 『農場の少年』における2人のイラストレーター	高野弘子	2015-No.17	27-36	ローラ・インガルス・ワイルダーの「小さな家」シリーズに絵をつけた2人の画家、ヘレン・シュエウェルとガース・ウィリアムズを比較。同じ作品部分を描いた絵をいくつも対比させ、前者はテキストに忠実に描いたこと、後者は下調べを徹底しテキストの背景までも描いたことを指摘した。出版元であるハーバー社の編集者アーシュラ・ノードストロームにより、シュエウェルの絵が装飾的かつ様式的であると評価されていた事実にも触れ、ウィリアムズを評価する立場をとっている。
94	研究ノート: 中国の民話「長髪妹」の絵本化をめぐる —昔話絵本のグローバル化にみる諸問題—	浅野法子	2015-No.17	37-46	中国、土族の民話である「長髪妹」について、それをもとに出版された絵本の日中両タイトルを挙げ、グローバル化により異国の視点が混ざることでももとの伝承から遠ざかってしまう様子を指摘。
95	報告:2014年絵本研究参考文献目録 (2014年1月-12月発行分)	浅野法子, 川内五十子, 坂本淳子, 永田桂子, 丸尾美保	2015-No.17	47-72	例年と同じ物に加え、各雑誌内での絵本関連記事リストも掲載。
96	研究論文: 波多野完治と「児童読物改善=関スル指示要綱」 (内務省警保局図書課/昭和13年10月) —引き継ぐべき課題とは何か—	佐々木宏子	2016-No.18	1-12	児童心理学者で、掲題の要綱策定を推進した波多野完治に、平成2年に論者が行った聞き取りをもとに構成。波多野の生い立ちから、要綱の前後で進んだ経緯を振り返り、現在以降の絵本研究に生かす道を模索するもの。
97	研究論文: かがくいひろし『もくもくやかん』論 —「もの」と「動き」を中心に—	鈴木穂波	2016-No.18	13-22	掲題の絵本一冊について、全画面の観察と解説をふまえて、どんなものにも命があるという作者の思いと、それを受け取った読者が自分自身の生を実感できると述べる。
98	研究論文: いわずさちひろ『となりにきたこ』を考える —ジェンダーの視点からの新たな可能性—	宮下美砂子	2016-No.18	23-35	掲題の一冊を、いわずさちひろの新たな画風と画業の展開をもたらした作品と位置づけ、全体を分析。さらにジェンダーの視点からどのような意味をもつかについて、制作当時の社会状況やちひろを取り巻く環境から観察した。
99	研究ノート: 漫画家と絵本 —「漫画家の絵本の会」の活動について—	森高光広	2016-No.18	37-48	1947-2004年までに30回(途中1回休み)開催された掲題の会についての記録。参加メンバーはおおば比呂司、佐川美代太郎、多田ヒロシ、手塚治虫、長新太、永島慎二、東君平、馬場のぼる、牧野圭一、前川かずお、柳原良平、やなせたかし。こくま社が1960年代に漫画家の絵本と積極的に出版していたことも関連している。
100	論説: 「五味太郎・しかけ絵本」シリーズにみられるヒトの視知覚的特性に符合する表現	坂部仁美	2016-No.18	49-54	五味太郎の作品のなかでも、ページの活用が顕著と論者が述べる「五味太郎・しかけ絵本」シリーズの3冊『きいろいののはちようち』『どうさんまいご』『まどからおくりもの』について分析。①めくりの前後に絵柄を変化させて、変化に敏感なヒトの視覚に訴えて効果を倍増させていること、②隠された部分を補完する視覚特性を刺激していること、③類似したものの同士をつなぐヒトの知覚特性を刺激していること、④言語的指示に影響をかける視覚特性を逆手に取り、意表をつつこと、⑤過去の記憶に影響される視覚特性を逆手にとって意表をつつことを指摘。五味の作品は人間の視知覚的特性に合致あるいは非合致することで固定概念にとらわれない柔軟な思考を促していると述べる。
101	報告:2015年絵本研究参考文献目録 (2015年1月-12月発行分)	浅野法子, 川内五十子, 坂本淳子, 永田桂子, 丸尾美保	2016-No.18	55-80	前年と同じく、雑誌記事リストもあり。
102	報告:絵本研究参考文献目録(海外)	木庄美千代	2016-No.18	81-86	本号から始まった。
103	報告:2015年絵本原画展・絵本画家展リスト (2015年1月-12月開催分)	竹迫祐子	2016-No.18	87-92	本号から始まった。
104	研究論文: 現代アーティスト元永定正の初期のえほん作品群 —『ももこもこ』より以前の5作品を中心に—	兒玉茜	2017-No.19	1-12	元永定正の抽象画家としての歩みを踏まえた上で、『ももこもこ』以前の5作品を観察し、作品群の特徴や『ももこもこ』につながるものを見出している。
105	研究論文: あべ弘士の絵本『エゾオオカミ物語』論 —野生動物の死の描き方を中心に—	杉浦篤子, 紫村紀代, 久保田知恵子, 清水貴子, 高橋晶子, 横田由紀子	2017-No.19	13-22	掲題の絵本を中心に、その描かれ方から、あべ弘士の死生観、アイヌの死生観にまで言及している。
106	研究ノート: 保育者養成校授業における絵本の効果 —『おこだてませんように』を読む学生の視点—	三好伸子	2017-No.19	23-32	保育者養成校での掲題の絵本を用いた授業を、学生の声の掲載も含めて記録している。絵本を用いたワークショップの例としてビッグアップできる。
107	報告: グルジア(ジョージア)絵本の現在	前田君江	2017-No.19	33-41	グルジアの絵本事情について、断片的に記録。最後にグルジアでの絵本ワークショップと思われる記述が少しあるが、特定の作家一人がしたことのみダイジェスト記録である。
108	報告: 2016年絵本研究参考文献目録 (2016年1月-12月発行分)	浅野法子, 川内五十子, 坂本淳子, 永田桂子, 丸尾美保	2017-No.19	43-66	前年と同じ。

109	報告: 2016年絵本原画展・絵本画家展リスト (2016年1月～12月開催分)	竹迫祐子	2017-No.19	67-76	前年に同じ。
110	研究論文: 武市八十雄の「感じる絵本」とは —『みえないけど みえるの』を中心に—	山口恵子	2018-No.20	1-10	至光社の武市八十雄のめざした「感じる絵本」というキーワードについて、特に掲題の絵本をサンプルにとり、分析。
111	研究論文: 哲学的なテーマのある現代絵本の可能性 —大人と子どもが『ぼくのニセモノをつくるに は』を対話的に読む—	永井雅子	2018-No.20	11-21	現代絵本を用いて対話をうながすワークを、掲題の絵本を使って4人の児童を対象に行った記録と考察。対話を生む要素として、絵と語り手の視点の差があること、「かもしれない」などの非断定的な語尾の存在、絵の描き込みを子どもがよく読み取る特性によって大人との読みにおいても対等性が生じること、絵本を貫くユーモアがあることを挙げている(この指摘は先行研究を下敷きにしている)。ワークショップ事例として数えることができる論文。
112	研究ノート: 『さっちゃんのおはのて』を学生同士が読み合 う効果 —保育者養成校のレポート記述の分析—	三好伸子	2018-No.20	23-31	保育者養成校での障害理解に関する授業で、掲題の絵本をその目的のために使用した際、学生たちがどう反応し表現して理解を獲得したかを記録している。ワークショップ実施の記録として位置づけられる。
113	研究ノート: イスラームにおける「描くこと」のタブーと「コー ラン物語」絵本 —インドの出版社 Goodword Books の Goodnight Story's from the Quran(2004) を中心に—	前田君江	2018-No.20	33-42	マイノリティ・イスラーム(イスラーム教が中心でないコミュニティにおけるイスラーム教徒)の子ども向けに作られたコーラン物語絵本のなかで、特にインドの掲題出版社の作品(論者の推測によればその作者はイスラームではなく、シーク教徒)を例に取り、分析。偶像崇拝を禁ずる教えに準ずるべく、人の代わりに彼らにちなんだ場所やものを描く表現、空の変化で目に見えない力を表す表現、人の代わりに動物を描く表現などの具体的工夫を指摘する。
114	報告: 2017年絵本研究参考文献目録 (2017年1月～12月発行分)	北海道えほん研究会(久保田知恵子、栗村紀代、清水貴子、杉浦真子、高橋晶子、横田由紀子)	2018-No.20	43-62	前年に同じ。
115	報告: 2017年絵本原画展・絵本画家展リスト (2017年1月～12月開催分)	竹迫祐子	2018-No.20	63-72	前年に同じ。

CINii検索「ワークショップ 絵本」

最終検索日:2018年11月1日 正午

文庫番号	タイトル	著者	書誌名	号数	ページ	発行年	発行元	メモ	分類
1	ワークショップ6「絵本づくり誕生」-(特集)自己表現1自己表現ワークショップからの報告	文珠 紀久野	人間関係	4	86-92	1987年	南山大学	ワークショップという言葉が一般的でない時代に、運営側も試行錯誤して絵本WSを作ろうとする状況があったとわかる。絵本WSで、自分の内にあるものを表出させることを目的とした取り組みの例。初期からいえる本研究が「題材に絵本作成」を目的とするのではなく、時代が下ると、どんなテーマが複雑になっていく(他の論文)は興味深い。	表現
2	キャラクターステッカーで交流を広げる絵本作りワークショップ(口頭による研究発表概要)	上平 崇仁, 石井 光恵, 笠尾 敦司	日本デザイン学会研究発表大会	48(0)	194-195	2001年	日本デザイン学会	子ども間のコミュニケーションを活性化させる道具として、ステッカー交換による絵本づくりをしている。活動にデジタル(コピー機、PC)で、ただしスタッフが準備に使うのみ)が介在。ステッカーを使って、絵が揃っていない子にも大丈夫な配慮をし、コミュニケーションを目的としている。	別テーマ(伝達)
3	南部福祉センター等複合施設「たきぎなし」にゼロから考える(特集 住民主体の設計術-参加のプログラムを身に付け、満足度を高める)- (解決への糸口)		日経アーキテクチュア	739	44-48	2003年	日経BP社	地域の福祉センターを住民参加型で造っていくときに、住民へのWSを取り入れた例。絵本は第一回WSでやわらかなイメージを住民に伝えるツールとして部分的に使われている。	導入
4	沖縄県立芸術大学でのワークショップ「ファンタジー」を染める」から 型染の絵本を作ろう	田島 征彦	月刊染織 α	269	27-32	2003年	染織と生活社	田島征彦の学生時代の授業についての回想と、今回のWS(学生時代を再現したような形)の一連の流れを記す。	表現
5	絵本と遊び ワークショップ 世界でたった一冊だけの写真絵本 (おとが子どもに出会う絵本)	和田 直人	別冊太陽	126	142-145	2003年	平凡社	墨田区の公立小学校での、絵本を手がかりにした身体表現WSのレポート。長新太「ちいせん」の見えるところ」(『ブリテン出版』)のなかの言葉「でまた」を活動の軸に描いている。	表現
6	絵本と遊び ワークショップ からだを使って絵本体験 (おとなが子どもに出会う絵本)	中村 奈々恵	別冊太陽	126	146-149	2003年	平凡社	埼玉県立うらわ美術館での、絵本制作WSのレポート。子どもたちが自分の写真を使って、各自一冊の絵本を作っている。	再現
7	本をとおして子どもとつきあう「おとうさんの絵本読みかせワークショップ」実践報告 (特集 ジェンダーの地平)	宮川 健郎	接続	4	98-120	2004年	ひつじ書房	大人(親)と絵本というテーマについて、実態とその人々の変化を見られる。絵本と児童文学の違い、絵本と紙芝居の違い、筆者と美子との絵本体験などをふまえて、父親への絵本読みかせWSの経緯を述べてアンケート結果などには、一般の大人が絵本をどう見ているのか、WSを経ての変化などが現れている。	読み聞かせの道具
8	オパへの視覚化をテーマにした本づくり:小学生を対象とした絵本づくりのワークショップを通して	吉田 尚美	神戸文化短期大学研究紀要	28	31-42	2004年	神戸文化短期大学	小学生を対象に、オパ本を創って絵にし、絵同士をつなぎあわせて絵本を作るWSを実施した。絵本作りで、絵本の表現そのものに触れようとする取り組みの例。既成の絵本を読むときの積極性を生むことを目的としていると思われる。	表現
9	手作り絵本を作ろう(合) (第35回全国学校図書館研究大会(岡山大会)研究集録 研究主題 未来を拓き、豊かな学びの中核となる学校図書館) - (実演・ワークショップ)	帆足 幾久子	今日の学校図書館	35(0)	440-442	2006年	全国学校図書館研究大会事務局	手作り絵本を作った製本までの方法のみが書かれている。実施にあたっての考えは「4 終わりに」にエッセンスが見られるが、参考になるほどではない。	その他(ハウツー)
10	総合的な視点に基づいた児童英語指導法に関する研究:英語を専科としない学生による積極的かつ専門的アプローチをめざして	竹下 裕子, 村上 哲朗, 柳沢 昌義, 山本 夏実	人文・社会科学論	23	99-139	2006年	東洋英和女学院大学	小学校での英語導入決定前夜に、児童に英語を教えるための総合的視野を学生・講師ともに構築した研究。この中で絵本は英語教材の一つとして登場しており、絵本を用いて英語を教えることへの学生の理解の進み方や今後の課題が浮上している。また「異文化理解」の項目でも、絵本は部分的に登場。総じて絵本は論文内で、英語学習(児童)において有効であるとの見方をされている。	別テーマ(調査)
11	絵本ワークショップの知財について考える (絵本周辺領域の研究動向)	大月 ヒロ子	絵本bookend	2007	90-92	2007年	絵本学会	絵本ワークショップが盛んになり始めた執筆当時、ワークショップ実施の際に気を付けなければならないことを記した本が出た。という告知も兼ねた記事。著者はミュージアム・エデュケーション・プランナー。該当著書は「子どものためのワークショップ」。	その他(宣伝)
12	創作者のための絵本ワークショッププログラム (第1回表現は「教育」できるか)	澤田 精一	絵本bookend	2007	115-120	2007年	絵本学会	ピンポイントコンペ(2000年-)の立ち上げから執筆当時までの、コンペ実施状況を通して、絵本作家志望者に向けたワークショップのあり方について述べる。教育しない教育を目指す、というのが言いたいと思われる。著者は福音館書店編集者。	プロ作家の育成
13	学生の協働活動を主軸とした地域子育て支援型実践教育の試み(1)キーワード「絵本」による「ものづくりワークショップ」の役割と父親像	坂田 千代子, 山下 明良, 堀倉 博弘 (他), 西尾 賢一, 森田 直子, 徳本 美	仁愛女子短期大学研究紀要	40	65-73	2008年	仁愛女子短期大学	親・その家族を対象に、絵本をテーマにしたWS集を実施し、参加した父親・不参加だった父親、その差や実践などに対してアンケートを行って、WSの事前事後で父親の育児・家事参加がどう変化したかや、積極的に育児参加できる父親の条件(父親像)をあげ出している。また、WSは学生が通常例として参加することを主軸にしており、その目的は彼らの将来的な子育てでジンの育成である。	別テーマ(調査)
14	保育者ワークショップ おとなが子どもに出会う絵本の世界-具体的分析鑑賞と絵本を使った楽しい演出法	谷出 千代子	ソシアス	2	21-24	2008年	仁愛女子短期大学地域活動実践センター	保育者に向けた講座の記録。絵本というメディアの捉え方(大人にも読めるものというニュアンス)に始まり、保育現場での展開の具体例を示す内容。	読み聞かせの道具
15	2007年度ワークショップ事業をふりかえって	渡辺 智子	おおしま絵本文化	14	40-46	2008年	射水市絵本文化振興財団	この年一年の絵本館の工作キット新商品と、過去からのキットについての動向の報告。全体としては工作の話題だが、その中で「絵本制作」をした割合などの数字もある。工作の一環として絵本制作も視野に入れた活動の例。	活動の一部
16	ワークショップでの1年を振り返って	森竹 祥子	おおしま絵本文化	14	65-70	2008年	射水市絵本文化振興財団	絵本のWSではない。館内で行っている工作WSの年間アイデア記録。ただし「絵本館らしさ」を求められたとの記述があるように、改善の余地があると感じているのがうかがえる。	その他
17	手作り絵本(中高) (第36回全国学校図書館研究大会 熊本大会)研究集録 研究主題 学びの力を培い、豊かな未来を創る学校図書館) - (実演・ワークショップ)	対崎 奈美子, 敷地 みどり	今日の学校図書館	36(0)	346-349	2008年	全国学校図書館研究大会事務局	講演記録。WSのわねいなどの記述はないが、「7 まとめ」がそれにあたるが、「いろいろな教科と組み合わせることの取り組みをすることで、感性を豊かにし、自己有用感を生み出す」が目的か。	活動の一部
18	親子で学ぶ幼児教材の研究	此川 祐樹	日本デザイン学会研究発表大会	56(0)	C18-C18	2009年	日本デザイン学会	親子のコミュニケーションを増やす教材を開発するのを目的に、テーマとして絵本を選び、どんな絵本がよいのかを探った研究。絵本が実験対象として捉えられている例。	検討の対象
19	創作者のためのワークショッププログラム(第3回) デジタルアートワークから製本までの絵本製作	佐藤 博一	絵本bookend: 絵本学会機関誌	2009	136-142	2009年	絵本学会; 東京	京都造形芸術大にて、著者が担当した数回の絵本制作ワークショップの流れや目的を述べ、1人の生徒の完成作品を部分的に見せている。「紙媒体への出力を前提としたデジタル作業を理解し、プロセスを設計、各工程の相関性と必然性を踏まえて適切な作業手順を組み立て、イメージを可視化、物体化することを目的とする。絵本の制作が目的の別の通過点として使われている。	別テーマ(伝達)
20	誌上製本ワークショップ 布表紙の絵本を作る (特集 豆本女子(2))	田中 栞	本の手帳	7	32-35	2009年	本の手帳社	布表紙の絵本の手作りの方法が、写真入りで解説されるハウツー記事。	その他(ハウツー)
21	いかに近代文学をやり直すか(特集) 日本文学協会第64回大会(第二日目)(文学)との出会い方	大塚英志	日本文学	59(4)	25-35	2010年	日本文学協会	中盤に絵本制作WSの記述あり。総「私小説」時代の、アマチュアが書くことの訓練を読む内容のうちで話題となっている。筆者は元評論家であり、大・高の教師。	表現
22	「さわってわかる」ことを考える	丹治 達義, 柏倉 秀良, 岡田 元展, 山田 秀代	視覚障害リハビリテーション研究発表大会プログラム・抄録集	19(0)	11-11	2010年	視覚障害リハビリテーション協会	大会中で行われたワークショッププログラムの紹介文。何をしたかの記述はないが、「さわる」ことを考えるWSの中で、それを助ける材料として絵本が紹介されたことは理解できる。	参考例
23	沿岸防災技術研究所の活動について	高山知司, 廣松智樹	沿岸技術研究センター論文集	11	85-95	2010年	沿岸技術研究センター	津波の恐ろしさと対策を伝える絵本を制作し、さらに各国語版でも翻訳出版した上で、この年にはインドネシアでそれを広めバックアップするためのセミナーを開いたことを報告している。啓蒙のために絵本を用いてWS(セミナー)をした例。	別テーマ(啓蒙)
24	父親の育児参加への支援体制づくりに関する試論:集客型と出前型への参加者の実態から	伊東知之, 谷出千代子	仁愛大学研究紀要 人間生活学部篇	2	121-130	2010年	仁愛大学	3年間を通じた絵本をテーマとするWS集(父親対象、母親や家族も参加可能)に参加した父・母を対象に、父の子育て参加の現状とWSがもたらした変化を調査し、報告。企業への出前型企画も交えて、個人だけでなく企業も巻き込んだ父親の子育て改革に踏み込んでいる。絵本WSを通して全く別の調査(父親の育児参加について)を行った例。	別テーマ(調査)
25	小さくてエコなミュージアム「すみだ環境ふれあい館」雨水活用を伝える学びの場 (特集 環境教育と雨水貯留浸透施設)1気づき、学び、そして伝える	柴早苗	水循環	81	15-19,2	2011年	雨水貯留浸透技術協会	墨田区の雨水に関する発信施設において、取り組みの一環として絵本文庫と読み聞かせ等WSをしていることの記述あり。	活動の一部

26	沿岸防災技術研究所の活動について	高山知司	沿岸技術研究センター論文集	12	81-89	2011年	沿岸技術研究センター	書籍、絵本ともに前年の記述とほぼ同じだが、前者では東日本大震災を受けて改訂版を「制作中」であること、後者ではすでに改訂版を出版し、映像を盛り込んだDVDもつけたことを報告している。セミナーやWSに関する記述はない。	その他
27	CGワークショップでの一年	毛利佑介	おおしま絵本文化	17	42-46	2011年	射水市絵本文化振興財団	CGを使ったグッズ制作WSの実施について、旧状と現状の比較。	その他
28	神戸「ガーデンシティ舞多聞」/みついでプロジェクト7、ていけいプロジェクト3	黒田 誠史、青木 誠人、佐々木 宏幸、谷口 文保、久本 真子	芸術工学	2011		2011年	神戸芸術工科大学	ゴルフ場再開発の住宅地を、産学協同で造っていくプロジェクトの一部記録(数年に渡り活動し、論文発表もされている)。その中で、絵本WSをしたというもの。取り組みの発生は、造形→絵本(コンテスト)→造形の順。	活動の一部
29	111-304 科学館における新しいスタイルのワークショップの展開：絵本の読み聞かせと体験活動を結んで(環境教育・STS学習・総合学習、一般研究発表(口頭発表))	長沼 健、廣瀬 紀子、山中 敦子、菊田 成哲、野上 智行、川上 朝子	日本理科教育学会全国大会要項	52	193	2012年	日本理科教育学会	科学館でものしきみなどを伝えるWSで、絵本を活用した例。参加者の意欲が増したと、メリットを報告している。	再現
30	学協会向け論文電子化・公開サービス(NII-EDS)コンテンツの移行先について(更新)沿岸防災技術研究所の活動について	高山知司	沿岸技術研究センター論文集	13	77-87	2012年	沿岸技術研究センター	書籍、絵本ともに、ほぼ前年と同じ記述内容。前者では改訂版が「校正中」となったことだけ変わっている。セミナー、WSに関する記述はない。	その他
31	エモーショナルリテラシーを絵本で育むワークショップ(特集 対人援助と感情労働:「感情」というナマモノのとりあつかい)	箱崎幸恵	そだちと臨床	12(-)	19-23	2012年	明石書店	「感情」をテーマとした絵本読み聞かせに始まり、造形や劇によって自分の中の感情をさぐるWSの様子を述べている。	導入
32	実践の振り返りからデザインの「知」を取り出す試み		日本デザイン学会研究発表大会要項集	60(0)	57	2013年	日本デザイン学会	絵本化することを、まとめる手段の一つとして使っている。	まとめ
33	沿岸防災技術研究所の活動について(平成25年度)	高山知司	沿岸技術研究センター論文集	14	63-69	2013年	沿岸技術研究センター	津波被害を小さくするための取り組みの一環として、絵本を出版しているとの記述あり(前年とほぼ同じに変化なし)。書籍についても、前年と同じく「校正中」とある。WS、セミナー実施の記述はない。	その他
34	科学館における地域連携活動の展開：科学絵本の読み聞かせと体験活動を結ぶ新しいスタイルのワークショップの実践	川上 朝子、長沼 健、廣瀬 紀子、山中 敦子、菊田 成哲	愛知教育大学芸術創造開発機構研究要	3	131-137	2013年	国立大学法人愛知教育大学	科学館で絵本(既成、創作)を取り入れたWSを実施した例。取り組みにより参加者の意欲が増し、一定のプラスが生じたと結論づけている。何か(この場合は科学)を伝える手段として絵本を介らせている例。	再現
35	「ユニバーサルデザイン絵本ワークショップ」の報告	林左和子	静岡文化芸術大学研究紀要	15	123-126	2014年	静岡文化芸術大学	2012～2014年にかけて、全12回行ったユニバーサルデザイン絵本の制作WSの記録。ユニバーサルデザインとは何かについて話を聞き、絵本の一面面を制作することで、テーマへの関心を深める目的がある。12回のうち、運営当事者は課題も多く残ると指摘している。絵本の一面面を作ることを通して、別のテーマを認識させる目的の例。	別テーマ(伝達)
36	絵本の読み聞かせによる子どものイメージの形成について：子どものアート遊びを通して	馬場 結子、森徳短期大学子ども学科	森徳短期大学研究紀要	53	167-183	2014年	森徳短期大学研究委員会	絵本から感じ取ったイメージを、絵本制作で言い表出させた例。造形あそびを、一定の枠内(準備した型紙に色を塗るなど)でさせているため、その不自由さで十分に子ども自身から発せられる状況を読み取れないのではと一顧考えたが、対象年齢が2歳～と低く、この方法が最適だろうと思い直した。	表現
37	ふれあいことばあそびふわふわころろろ実施結果：アンケート集計結果の概要(総合研究所News 2014年度 聖学院大学総合研究所：【子どもの人格形成と絵本】研究プロジェクト主催：子どもの育ちと絵本研究ワークショップ)	聖学院大学総合研究所	聖学院大学総合研究所Newsletter	Vol.24 (No.1)	52-54	2014年		使用不可。WS内で何をしたかなどが読み取れないため。	その他
38	13B01 小学校理科・生活科における科学絵本の研究：科学絵本の教材化と授業プランの提案(授業研究、一般研究発表(口頭発表))	仲井勝巳	日本理科教育学会全国大会要項	65	249	2015年		小学校4年理科、2年生活科で、絵本の読み聞かせや絵本作成を取り入れた例の報告。主に低学年の授業導入に絵本が有効と結論づけている。WSの話題はない。	その他
39	感性こぼれ遊びのオノマトペはひらく物語の世界 宣傳資料の「雪むわり」は実施結果：アンケート集計結果の概要(総合研究所News 聖学院大学総合研究所主催【子どもの人格形成と絵本】研究プロジェクト主催)	聖学院大学総合研究所	聖学院大学総合研究所Newsletter	Vol.24 (No.2)	38-39	2015年		使用不可。タイトルにあるWSが実施された事実のみわかる。何をしたかなどは読み取れない。	その他
40	「ユニバーサルデザイン絵本ワークショップ」の報告	林 左和子	静岡文化芸術大学研究紀要	15	123-126	2015年		ユニバーサルデザイン絵本を作るWSの、具体的な開催記録。ただし、何をしたのかの詳細な記述はなく、「効果」「課題」も筆者の予測にとどまる。	別テーマ(伝達)
41	研究ワークショップ「ふれあいことばあそび実施結果：アンケート集計結果の概要(総合研究所News 聖学院大学総合研究所【子どもの人格形成と絵本】研究プロジェクト主催：子どもの育ちと絵本研究ワークショップ)」	聖学院大学総合研究所	聖学院大学総合研究所Newsletter	Vol.25 (No.1)	61-63	2015年		使用不可。WS内で何をしたかなどが読み取れないため。	その他
42	子どもにとっての「家」の意味に関する人間学的考察：ワークショップ型授業における協同考察を通じて	村井 尚子	大阪樟蔭女子大学研究紀要	9	175-185	2016年	大阪樟蔭女子大学学術研究会	教育学系大学における授業で、「家」についての意味を連続授業で考えるシリーズの中で、『わたしのうち』などを用いての「経験の拡大」をはかる取り組みがなされている。経験の拡大に関する記述が資料内にあり。	経験の拡大
43	「ユニバーサルデザイン絵本ワークショップ」の可能性と今後の展望	小坂 博子、林左和子、オノマトペ、ハヤシ サワコ	静岡文化芸術大学研究紀要	16	129-132	2016年		ユニバーサルデザインを考えるきっかけとして絵本作りを使用した例。	別テーマ(伝達)
44	鑑賞と表現をつなぐ図画工作の指導法—小学校低学年までの鑑賞を対象とした絵本制作ワークショップの試みから—	岡山万理	人文・社会科学論集	34	57-68	2017年	東洋英和女学院大学	モネの作品の鑑賞から、小学生が物語を作り、絵本を集団で完成させる活動を通して、「鑑賞と表現が相互に関わり合い深まり合う」ことを見出している。「鑑賞の末に理解する」ということを目的とした活動のなかで、絵本作りを介らせている例。	表現
45	美術館での博物館体験を視覚化。共有する試み：ワークショップ「ミュージアムでの思い出を絵本にしよう」の事例から	坂倉真衣	博物館学雑誌	43(1)	19-26	2017年	全日本博物館学会	博物館での体験を自身が客観的に捉え、他者と共有するのを目的に、「絵本」という手段を用いている。	表現
46	タイ・チェンマイにおける洪水経験を伝承する防災絵本の制作ワークショップ	田中麻里、ジャイムック・パボーン	一般社団法人日本家政学会研究発表要旨集	70(0)	2-2	2018年		発表会プログラムの紹介文。タイ・チェンマイの洪水頻発地において、過去の洪水時の対応をヒアリング調査した上で、子どもたちがそれを元に防災絵本をWSで制作したことを報告する内容。絵本WSを通して、別のテーマ(防災)の啓蒙を行う例。	別テーマ(啓蒙)
47	保幼小連携を意識したワークショップの可能性の検討：参加者アンケートの結果から教員によるモデル提示の有用性を探る	横井志保、宇野民幸、滝浪常雄	名古屋学院大学論集 人文・自然科学篇	55(1)	47-54	2018年	名古屋学院大学	低学年に有効な教育アプローチは何かを明らかにするに、絵本を取り入れ、結果的に有効とわかった。小学校1～2年生には絵本の読み聞かせからワークにつながるやり方が有効。教科をへだてず生徒を参加させることで自然と学ぶ姿勢がでると述べる。	検討の対象